

俗諺に、ないもの喰はうが人の癖といふことあり、實に人情は得がたきを尊み、常に有つて大益有るものを輕んじ賤めて信せず、

〔鹽尻^{十八}〕義教將軍の時、松浦肥前守源茂、御數寄ごとに、赤塗の烏帽子を著して參りしかば、將軍其姿を自畫圖して賜ひし、茂、薙染の後、かの像を南禪寺に納めしとかや、當時の諺に、すきに赤烏帽子といひけるは、この故事也とぞ、

〔駿臺雜話一〕妖は人より興る、すべて人の忌おそる、所は、世話におそろしき物の見たきといふやうに、さながら心に忘れえぬほどに、思想にひかれて、火のかつもへ、かつきゆるやうに、あるとみつなしと見つして、かくしてやまねば、氣うかれて、我にもあらずなりぬる、略下

〔犬筑波集^春〕二月十五日嵐はげしければ

花よりもだんごとたれか岩つ、じ

〔今昔物語^{二十八}〕信濃守藤原陳忠落^入御坂語第卅八

守答フル様落^入ツル時ニ、略中 其ノ木ニ平茸ノ多ク生タリツレバ、難見^見弃クテ、先ツ手ノ及ビツル限リ取テ、旅籠ニ入レテ上ツル也、未ダ殘リヤ有ツラム、云ハム方无ク多カリツル物カナ、略中
汝等ヨ、寶ノ山ニ入テ、手ヲ空クシテ返タラム心地ゾスル、

〔砂石集^{二上}〕佛舍利感得人事

此入道無智ノ在家人ナレドモ、眞實ノ信心有ケレバ、感應ムナシカラズ、經ニハ信ハ道ノ源、功德ノ母ト説キ、寶ノ山ニ入テ、手ヲムナシクストイフハ、信ノ手ノナキユヘト見ヘタリ、

〔續世繼^{ほり}七〕ほりかはのながれ、天台大師の經をしやくし給に、四の法文にてはじめ、如是より經のすゑまで、くごとしやくし給へば、そのながれをくまん人、法をとかんそのあとを思べければとて、はじめには因縁などいひて、さまざまの阿彌陀佛をときて、むかし物がたりときぐしつ、何